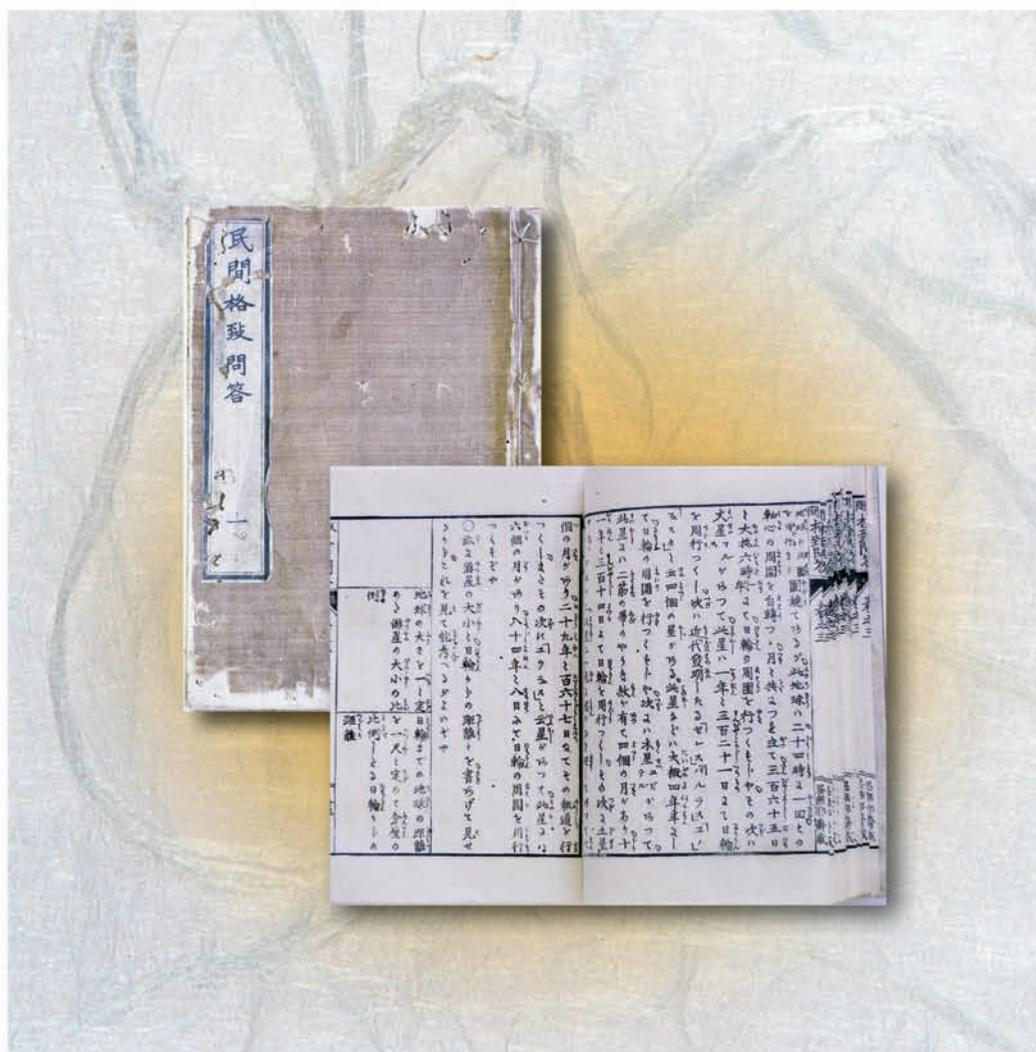


ひかり野

佐賀大学附属図書館報 No.31



『民間格致問答』 佐賀大学附属図書館蔵 小城鍋島文庫
(解説は最終ページ)

表紙解説

地域学歴史文化研究センター教授 青木 歳幸

本書は、佐賀藩医で蘭方医大庭雪齋（1806～73）が、1861（文久元）年に翻訳を終え、60歳の1865（元治2）年に出版した自然科学入門書で、全6冊。原著は1830年にオランダで出版されたJohannes Buijs著「フォルクス・ナチュールキュンデ（Volks-natuurkunde）」である。natuurkundeは自然科学の意味で、本書では、万有学と翻訳されている。

「格致」は格物致知で、朱子学では、知を拡充して（致知）事物に内在する物理法則をきわめる（格物）という意味である。自然科学の啓蒙書として問答形式で出版されたものを、大庭雪齋が幕末における民間への自然科学入門書として、大坂天満難波筋鳥屋文兵衛から出版した。販売先は大坂、京都、江戸のほか佐賀の原口吉二方もあった。

内容は、分子、引力、地動説、光など自然科学全般の解説を、先生と植木職人の問答形式で、話し言葉で書いている。また、すべての漢字に読み仮名をふって平明さを徹底している。地動説の説明では、太陽の近くに水星（メルクリュス）があり、この星は太陽の周りの軌道を88日で一周し、次の金星（フェニクス）は225日で一周する。地球は24時間に1回地軸を中心に自転しつつ、月と一緒に365日と約6時間で太陽の周りを一周する。次には火星（マルス）、木星（ユピテル）、土星（サチュリニクス）、『ユラニクス』（天王星）があると説明している。1830年当時の西洋天文学の到達度がわかる。

雪齋は、キリスト教についても深い理解を示していた。が、造物主キリストという語はまだタブーな時代であったから、著書『訳和蘭文語』ではキリストをモーセに言い換えて翻訳しているなど、慎重に翻訳を行っていた。

雪齋は、佐賀藩医大庭家に養子にはいり、17歳の頃、佐賀の蘭方医島本良順についてオランダ医学を学び、のち、大坂で緒方洪庵とともに中天游に蘭学を学んだ。帰郷後、藩医として西洋医学や西洋自然科学の普及につとめた。佐賀藩で他出蘭学塾修業者数が佐賀出身伊東玄朴塾の44名について、緒方洪庵塾が35名と多いのも大庭雪齋の影響であろう。1851（嘉永4）年、藩の蘭学寮初代教導、1858（安政5）年、藩の医学校好生館教導方頭取になり、好生館での全藩領医師の西洋医学研修を義務づけるなど、幕末期佐賀藩の西洋医学化を主導した。1865（慶応元）年に高齢のため職を辞し、1873（明治6）年没した。享年68歳。墓は佐賀市伊勢町の天徳寺にある。主な著書に『民間格致問答』のほか、オランダ文法書『訳和蘭文語』（安政2年～4年刊、全5冊）、西洋数学書『算字算法基原或問』（幕末）などがある。